The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	PDRにおける行動特性としての親密性の検討 : 恋人関係と異性友人関係との比較を通じて
Author(s)	山口, 司; 今川, 民雄
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 163-168
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7523
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 10, 2010

PDR における行動特性としての親密性の検討 1)

―恋人関係と異性友人関係との比較を通じて―

山口 司(北星学園大学大学院社会福祉学研究科)
今川民雄(北星学園大学社会福祉学部)

本研究では、Post-dissolution relationship(PDR)について、親密性の観点から、恋愛関係や異性友人関係との比較を行った。144 名(男性 75 名・女性 68 名・不明 1 名)の大学生・専門学校生を調査協力者に RCI(Relationship Closeness Inventory)の行動特性指標を用いて比較した結果、全体的に恋人関係が PDR や異性友人関係より高い値を示し、PDR と異性友人関係との間には有意な差は見られなかった。また、過ごす時間でのみ交互作用がみられ、男性は PDR と異性友人関係を区別していないが、女性は PDR と異性友人関係とを区別していることを示唆しており、PDR に対する男女の接し方の違いを反映している可能性があった。

キーワード：PDR、RCI、恋愛関係、異性友人関係、失恋

問題と目的

近年、失恋の研究が増えている。失恋は青年期にとって重大なストレスイベントであり、時に失恋は、失恋した者のその後の人生に大きな影響を与える。そのような失恋後の状態に関する研究の中で、失恋後の立ち直りについての研究が近年増加している(石本・今川, 2001; 山下・坂田, 2008)。山下・坂田(2008)は、ソーシャル・サポートが立ち直りに影響を与えることを明らかにしている。このことは、失恋からの回復にとってサポート提供者との関わりが重要であることを示している。ところでサポート提供者にはさまざまな人物が考えられるが、失恋の対象となった相手との関係が、失恋後の立ち直り過程にどのような影響をもたらすかについては、ほとんど取り上げられてこなかった。そのような恋愛関係崩壊後の関わりについて、増田(2001)が、「恋愛関係崩壊後の同一パートナーによる元恋人同士の友人関係(Post-dissolution relationship; 以下、PDR)」と定義しているが、本邦では、恋愛関係崩壊後の失恋相手とのその後の関わりについての研究はほとんどない。わずかに山口・今川(2006)が、PDR が一般的に普及している関係なのか、恋人関係や異性友人関係のようなほかの異性関係と異なる関係形態なのかについて調査し、PDR が恋人関係や異性友人関係と異なる性質をもつことを示唆した。しかし、PDR の特徴についてはまだ十分に検討されていないのが現状である。そこで、本研究は同じ異性との関係である恋人関係と異性友人関係とを比較検討することで、PDR の特徴について明らかにしようとした。その際、実際の二者間の相互作用のあり方が上記の 3 つの関係において異なるのではないかと考え、そうした観点から親密性を捉えている Berscheid, Snyder, & Omoto(1989)の RCI (Relationship Closeness Inventory; 以下、RCI)を取りあげることとした。RCI は、Berscheid et al.が、Kelley, Berscheid, Christensen, Harvey, Huston, Levinger, McClintock, Peplau, & Peterson(1983)の考えにもとづき、(1)お互いに影響を及ぼし合う頻度(frequency)、(2)お互いに及ぼし合う影響の強さ(strength)、(3)二人で行う行動の多様性(diversity)の 3 つの下位指標から、関係の親密性を測定する尺度である。

本邦では、RCI を用いた研究として、久保(1991, 1993)、大坊(1992)、谷口(2004)などがある。久保(1991, 1993)は、Berscheid et al.(1989)の RCI の問題点と本邦での妥当性を検討している。久保(1991)は、RCI の項目において日米の文化的差異があり、RCI を原文のまま使用することへの注意と、接触時間(frequency)の指標についての問題点を挙げている。接触時間の二人で過ごす時間という問いには、「約束をしたりして、積極的に二人だけで過ごす機会を作っている場合」と「特別約束しているわけではないが、二人で過ごす機会が自然と多くなっている場合」という 2 つの意味が考えられると主張し、また、直接会う場合(直接接触)では、「二人で会う機会」と「その際、過ごす時間」と電話で話す場合(電話接触)では、「電話で話す機会」と「その通話時間」といったように接触時間の指標を 4 タイプに細分化する必要性を述べている。そして、相関分析の結果から、二人で過ごす機会よりも、一回あたりに過ごす時間の長さの方が、関係の親密さを強く反映すると示唆している。さらに RCI の妥当性を検討した久保(1993)は、RCI の限界として、「親密な関係は、行動特性の単純加算によって評価するよりも、複数の主成分による多次元上において評価されるべきものであること」を示唆し、RCI の適用に妥当性のあるケースとないケースについて述べ、妥当性のあるケースとして、「つきあい始めてからの期間が比較的短く、日頃、頻繁に会う機会があり、そして、日々の生活の中で幅広い関わりをもっているような関係(p. 9)」

Table1 行動の多様性の指標として用いた項目

1.遊園地･動物園に行った	11.同じ所でｱﾙﾊﾞｲﾄをした	21.散歩をした
2.映画を見た	12.DVD･ﾋﾞﾃﾞｵをみた	22.ｽﾎﾟｰﾂ観戦をした
3.ﾃﾚﾋﾞを見た	13.教会やお寺に行った	23.ｻｰｸﾙ活動
4.ｶﾌｪ(喫茶店)に行った	14.ｺﾝｻｰﾄに行った	24.ﾊﾟﾁﾝｺ･ﾊﾟﾁｽﾛ･競馬に行った
5.食事に行った	15.勉強した	25.ﾃﾚﾋﾞｹﾞｰﾑをした
6.飲みに行った	16.ｹﾞｰﾑｾﾝﾀｰ･ｱﾐｭｰｽﾞﾒﾝﾄ施設に行った	26.自分かその人の親と食事をした
7.泊まりがけの旅行に行った	17.ｶﾗｵｹに行った	27.ｽﾎﾟｰﾂをした
8.ﾄﾞﾗｲﾌﾞに行った	18.雑談をした	28.ｱｳﾄﾄﾞｱ(ｷｬﾝﾌﾟ･釣り･登山･ﾋﾟｸﾆｯｸなど)
9.音楽を聴いた	19.本･雑誌･漫画を見た	
10.ｲﾝﾀｰﾈｯﾄをした	20.ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞをした	

注) 下線は谷口(2004)から修正した項目

をあげ、妥当性がないケースとして「つきあい始めてからの期間が長く、現在ではあまり会う機会がないが、会うと長時間屈託なく過ごせるような関係(p. 9)」をあげ、RCI をすべての対人関係に適用することの妥当性に疑問を投げかけている。

また、大坊(1992)は、大学生を対象に Berscheid et al.(1989)の RCI を基調に日本語版を作成し、親密な対象との行動傾向を検討した結果、接触機会や影響力において、一日の接触総時間、昼、夜の接触時間、電話回数、電話通話時間、生活への影響度、将来の計画への影響度などは恋人群が友人群よりも有意に高く、会う頻度、知り合ってからの期間は、友人群の方が恋人群よりも有意に高く、多様性においては、活動の多様性で、恋人群が友人群よりも高く、私的な活動では、恋人群が、学校関連の活動では、友人群の方が高くなること、また、性差もみられ、電話回数、電話通話時間、朝の接触時間、相手と一緒に行った活動の多様性で男性よりも女性の方が高いと報告している。また、比較的最近では、谷口(2004)が RCI の改訂と妥当性ついて検討し、関係の長さ(短期･中期･長期)×関係の種類(恋人･片思い･異性友人関係)×性別(男性･女性)の 3 要因の分散分析を行った結果、関係の種類において、すべての接触ツール(直接接触、電話、携帯電話、メール)、接触回数、接触時間、行動･話題の多様性、生活･考え方に与える影響、すべての行動特性で恋人関係がそれ以外の異性友人関係よりも有意に値が高く、また、片思い関係と異性友人関係とでは、行動特性の値に大きな相違は見られなかったが、生活･考え方に与える影響において、片思い関係は異性友人関係よりも値が高くなっており、片思い関係と異性友人関係は生活･考え方に与える影響の強さによって識別できるとした。関係の長さについては、いくつかの行動特性で関係の長さとの関連が見られ、関係の長さに応じて使用する接触ツールが変化すると指摘している。性差については、男性は女性よりも、会う回数、携帯電話回数、メール受信数が多くなっていた。また、女性は男性よりも関係から強い影響を受けていたと報告している。そして、谷口(2004)は、新しい接触ツールに関する項目の必要性や RCI の項目の改訂の必要性を述べている。以上の結果から、RCI で親密性を測定する場合は、対象となる者との関係の形態や回答者の性別が問題となる。とりわけ、関係の形態の特徴は、大きな問題となるであろう。上述の先行研究の結果は、友人関係や各異性関係における親密性についての知見を提供したが、こと異性関係においてはより詳細な分類が必要であると思われる。そこで、本研究では、親密な関係のうちで青年期に重要な関係であると思われる恋人関係や異性友人関係についての親密性を PDR とともに RCI を用いて測定し、3 つの異性関係間の親密性の比較検討をする。

方法

手続き

2007 年 5 月上旬、北海道札幌市近隣の大学生 71 名、専門学校生 73 名、計 144 名(男性 75 名、女性 68 名、不明 1 名)に調査協力を得た。調査は授業の時間を利用して質問紙を配布し、集団で行った。

質問紙の構成

調査協力者は、交際経験の有無、現在の恋人の有無、別れの経験の有無、PDR の有無に応じて質問内容を選択して回答した。質問は、現在の恋人について、PDR についておよび家族以外の最も親しい異性についての 3 種類があった。なお、現在、別れの経験があり、別れた相手と何らかの関わりがあって、現在恋人がいるものについては、恋人と PDR について回答してもらっ

た。 (1)デモグラフィックな質問: ①年齢、②性別、 (2)関係の特徴に関連する質問: ①交際経験の有無、②現在の恋人の有無、③別れの経験の有無、④PDR の有無、⑤思い浮かべた相手の年齢、 (3)行動特性に関する質問: 久保(1993)、谷口(2004)の RCI 項目を使用して、ここ 3 ヶ月程度の関わり方について尋ねた。①関係の長さ(知り合ってからの期間(異性友人)、付き合ってからの期間(恋人)、別れてからの期間(PDR))、②会う頻度、③一度に会った時に過ごす時間、④電話の頻度(携帯電話も含む)、⑤一度の電話の通話時間、⑥メール送信数、⑦生活に与える影響、⑧考え方に与える影響、⑨話題の多様性 15 項目(その他を含む)、⑩行動の多様性 29 項目(その他を含む)。話題の多様性については、久保(1993)、谷口(2004)と同様の 14 項目を使用し、行動の多様性については、谷口(2004)を参考に作成した 28 項目を用いて(Table 1)、ここ 3 ヶ月の間に、想定した相手との間で行ったことのある行動、および会話の話題すべてに○印をつけるように求めた。また、本研究では報告しないが、松井(2000)の恋愛の進展段階 17 項目、関わりをもつようになったきっかけ、関わりをもつことのメリット[2)]、関わりをもつことのデメリット[2)]についても併せて回答を求めた。

結果

本研究では、PDR の相互作用の特徴を詳細に捉えるために、行動特性ごとに分析を行った。その際に、久保(1993)、谷口(2004)は、会う頻度、電話の頻度、メール送信数の頻度の指標を一週間単位で各変数を統制したが、一週間単位だと、時期によっては接触がない場合が考えられたので、単位を月単位で統制した。また、時間の指標は、分単位に統制した。また関係形態について、現在恋人があり、かつ PDR も持っている場合、恋人関係と PDR とが相互に影響する可能性があるため、PDR と恋人の両方をもつ群は本報告から除外し、分析することにした[3)]。その結果、恋人関係群 28 名(男性 13 名･女性 14 名･不明 1 名)、PDR 群 31 名(男性 22 名･女性 9 名)、異性友人関係群 64 名(男性 30 名･女性 34 名)、計 123 名(男性 65 名･女性 57 名･不明 1 名)を本研究の分析対象とした。Table 2 に関係の形態ごとの平均値と標準偏差を示す。

行動特性の尺度化

久保(1993)、谷口(2004)に倣い、各行動特性は値の範囲を 7 段階尺度に統制し、その値を以下の分析に用いた。生活に与える影響、考え方に与える影響を除く 7 項目を開平変換を用いて 7 段階尺度に変換した。

関係の形態、性別による行動特性の違い

関係の形態、性別によって行動特性に違いがみられるかを検討した。各行動特性を従属変数とし、独立変数としての関係の形態は、恋人関係、PDR、異性友人関係の 3 水準、性別は、男性、女性の 2 水準とした二要因分散分析を行った。なお、欠損値の有無により各項目間でケース数のばらつきがある。分散分析の結果、まず、関係の形態において、会う頻度、過ごす時間、電話頻度、通話時間、メール送信数、話題の多様性、行動の多様性、生活に与える影響力が 1%で有意な主効果が見られた(それぞれ、 $F(2, 107) = 5.30$ $p < .01$、 $F(2, 101) = 6.21$ $p < .01$、 $F(2, 105) = 18.48$ $p < .01$、 $F(2, 105) = 5.49$ $p < .01$、 $F(2, 99) = 13.41$ $p < .01$、 $F(2, 116) = 17.15$ $p < .01$、 $F(2, 116) = 25.39$ $p < .01$、 $F(2, 116) = 16.53$ $p < .01$)。考え方に与える影響力のみで 5%の有意な主効果が得られた($F(2, 116) = 3.19$ $p < .05$)。多重比較(以下すべて Bonferroni 法)の結果、会う頻度、過ごす時間、電話頻度、メール送信数、話題の多様性、行動の多様性、生活に与える影響力で、恋人関係が、PDR や異性友人関係より有意に高い値を示し、PDR と異性友人関係との間には差は見られなかった。通話時間、考え方に与える影響力で恋人関係と異性友人関係の間に差は見られたが、恋人関係と PDR、PDR と異性友人関係との間に差は見られなかった。性別においては、電話頻度($F(1, 105) = 4.06$ $p < .05$)、通話時間($F(1, 105) = 6.53$ $p < .05$)、メール送信数($F(1, 99) = 4.21$ $p < .05$)で有意な主効果が見られた。電話頻度、通話時間、メール送信数、すべてで男性が女性よりも得点が高かった。関係の形態×性別の交互作用においては、過ごす時間でのみ有意傾向ではあるが交互作用が見られた($F(2, 101) = 2.72$ $p < .10$)。単純主効果検定の結果、男性の恋人関係と男性の異性友人関係の間に 5%水準、女性の恋人関係と女性 PDR で 5%水準、女性の PDR と女性の異性友人関係で 10%水準、そして、異性友人関係の男女間に 10%水準で有意傾向差がみられた。

RCI の算出および検討

RCI の算出に当たって、久保(1993)、谷口(2004)を参考にして、月単位で会う頻度と 1 回当たりに過ごす時間とをかけ合わせたものを月単位に過ごした総時間の指標にし、話題の多様性に行動の多様性の和を 2 で除したものを多様性の指標とし、生活に与える影響と考え方に与える影響の和を 2 で除したものを関係の強さの指標とし、月単位の総時間、多様性、関係の強さを単純加算したものを RCI 得点とした。なお、各行動特性の分散分析の結果、RCI を算出するための行動特性間で性差はみられなかったので、RCI 得点の算出には性別を考慮しない。RCI 得点を従属変数、関係の

Table2 関係の形態ごとの平均値と標準偏差

	恋人		PDR		異性友人	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
会う頻度(回/月)	12.04(11.03)	11.04(12.18)	1.28(2.73)	6.46(10.49)	3.91(5.23)	7.44(10.01)
過ごす時間(分/回)	300.00(97.21)	355.00(238.91)	242.37(362.14)	78.20(93.70)	155.36(116.54)	265.16(269.00)
電話頻度(回/月)	15.81(21.50)	6.88(9.24)	1.98(6.51)	0.08(0.17)	2.33(5.87)	1.48(3.27)
通話時間(分/回)	64.62(58.78)	23.23(34.25)	32.55(44.47)	23.75(63.23)	18.05(32.70)	15.95(36.33)
メール送信数(回/月)	621.33(1093.58)	106.71(233.50)	95.32(211.45)	0.78(0.76)	45.36(129.72)	8.05(16.97)
生活に与える影響(1-7)	5.36(1.36)	6.07(0.82)	3.09(2.09)	2.89(2.42)	3.70(1.78)	3.82(1.83)
考え方に与える影響(1-7)	4.79(1.36)	4.64(1.90)	3.73(1.95)	3.78(2.22)	3.73(1.85)	3.56(1.59)
話題の多様性(0-15)	12.36(1.39)	10.93(2.84)	6.27(4.69)	6.33(3.80)	6.33(3.10)	7.76(3.21)
行動の多様性(0-29)	18.36(3.99)	15.50(4.65)	7.73(5.79)	7.78(6.76)	6.40(4.46)	9.24(4.97)

注) (　)内は標準偏差

形態を独立変数として一要因分散分析を行った結果、恋人関係(M = 14.02)が PDR(M = 9.15)や異性友人関係(M = 9.84)よりも有意に RCI 得点が高かった(F (2, 102) = 27.36(p < .01)。

考察

恋人関係、PDR、異性友人関係の 3 つの異性関係と性別について RCI における行動特性を検討した結果、まず、関係の形態の全体的な傾向として、RCI を構成するいずれの行動特性においても恋人関係が PDR と異性友人関係より高い値を示したが PDR と異性友人関係との間には差はみられなかった。この結果は、同じように異性関係について RCI の検討をした谷口(2004)の結果とも一致し、恋人関係がいかに高い親密性を有しているかが再確認された一方で、行動特性をもとにした親密性において、PDR は異性友人関係と同程度であることが確認された。これは RCI の行動特性が二者間の相互作用を測定していることに由来する結果である可能性が指摘できる。すなわち、会う頻度の回数からもうかがえるように PDR や異性友人関係は恋人関係に比べて接触頻度が少なく、その結果、RCI で測定される実際の相互作用である行動特性が低くなったと推測できる。また、RCI 得点において PDR と異性友人関係が識別できなかったことについては、Berscheid et al.(1989)が 12 のポジティブな感情と 15 のネガティブな感情からの ETI(Emotional Tone Index)と RCI との間に関連がみられなかったとの指摘が参考になる。RCI のような感情的な側面を含まないで実際の相互作用を検討する尺度では、恋愛関係と PDR を区別することは出来ても、失恋という経験を通じての特有な情緒的つながりを含む可能性のある PDR と異性友人関係と区別するのは難しいという可能性を示唆している。

また、性差については、谷口(2004)では、会う回数、携帯電話回数、メール受信数で、男性が女性よりも高い値を示した。本研究では、電話回数、通話時間、メールの送信数というコミュニケーション・ツールを用いたコミュニケーションで、男性が女性よりも高い値を示し、異性との関係について検討した谷口(2004)の結果と一部一致する。これは、昨今の携帯電話の普及とともに、男性の方が女性よりも異性との相互作用の際に、道具を利用しやすいということを示唆している可能性がある。今後はコミュニケーションにおける道具の利用頻度や使用目的の性差について、関係の種類の違いとともにより詳しい検討が必要である。また、過ごす時間においてのみ交互作用が見られたことについては、男性は実際に一緒に過ごす時間を PDR と異性友人関係とで区別していないが、女性は PDR と過ごす時間と異性友人関係と過ごした時間を区別していることを示唆しており、PDR に対する男女の接し方の違いを反映している可能性がある。

本研究は、行動特性という点からの親密性について PDR と恋人関係、異性友人関係を比較した結果、PDR が恋人関係と異なった親密性を有しているといえた。しかし、PDR と異性友人関係との間には差はみられなかった。この結果は、行動の量的側面の指標では PDR と異性友人関係を識別できないとした山口・今川(2006)の結果を支持するような結果が得られた。つまり、RCI のような実際の相互作用を検討するような測度では、PDR と異性友人関係との違いは明確にならず、行動の量的レベルでは、PDR と異性友人関係は同程度であるということがわかった。PDR と異性友人関係との差異は何なのか。山口・今川(2006)では、恋愛関係行動の質という点において、PDR と異性友人関係との間に差が見られたことから、行動の質的なレベルで PDR と異性友人関係は異なると思われる。今後は、そのような行動の

質的なレベルやすでに触れた感情的側面、関係関与への動機やほかの指標を用いて PDR と異性友人関係との差異を検討する必要がある。本研究における今後の課題として、1 つは、調査協力者の少なさが挙げられる。今後は、調査協力者数を増やし再検討する必要がある。もう 1 つは、PDR の下位カテゴリーについてである。久保(1993)が「親密な関係は、行動特性の単純加算によって評価するよりも、複数の主成分による多次元上において評価されるべきものであること(p. 9)」と主張しているように、PDR もいくつかの主成分を想定して、特徴を把握する必要がある。実際に、山口・今川(2009)では、PDR を恋愛関係行動と友人関係行動をもとに分類した結果、いくつかの形態が確認されている。今後は、PDR の下位カテゴリーも併せて検討する必要がある。

最後に、恋愛関係から派生する PDR は非常にユニークな関係である。PDR は自発的に形成されたものか否か、また、崩壊後すぐに形成されたのか、一定期間が経過した後形成されたものかどうかなど、さまざまな形成要因・形成意図の影響によってその様態が異なると思われ、さまざまな PDR の形態が存在する可能性がある。そこで、今後は PDR 概念の詳細な検討を通じて PDR の下位カテゴリー、PDR の形成過程、そして、PDR の独自の機能などについての検討が必要である。

引用文献

Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology,* **57**, 792-807.

大坊郁夫 (1992). 親密な関係における行動特性の検討 日本グループ・ダイナミックス学会第 40 回大会発表論文集, 59-60.

石本奈都美・今川民雄 (2001). 青年期における失恋後の立ち直り過程 対人社会心理学研究, **1**, 119-132.

Kelley, H. H., Berscheid, E., Christensen, A., Harvey, J. H., Huston, T. L., Levinger, G., McClintock, E., Peplau, L. A., & Peterson, D. R. (1983). *Close Relationships*. New York: Freeman.

久保真人 (1991). 親密な関係とその行動特性 大阪教育大学紀要 第IV部門, **39**, 265-270.

久保真人 (1993). 行動特性からみた関係の親密さ―RCI の妥当性と限界― 実験社会心理学研究, **33**, 1-10.

増田匡裕 (2001). 以前の恋人との友人関係(PDR)と新しい恋愛関係の交渉と葛藤についての探索的研究―対人関係の正当性に関するフォーク・サイコロジー― 日本社会心理学会第 42 回大会発表論文集, 250-251.

谷口淳一 (2004). RCI の改訂と妥当性についての検討―RCI で測定される関係の親密さとは？― 対人社会心理学研究, **4**, 55-66.

山口 司・今川民雄 (2006). 付き合っていた異性とのその後の関係―恋愛関係と異性友人関係との比較― 日本社会心理学会第 47 回大会発表論文集, 576-577.

山口 司・今川民雄 (2009). 付き合っていた異性とのその後の関係(2) 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会発表論文集, 714-715.

山下倫実・坂田桐子 (2008). 大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連 教育心理学研究, **4**, 57-71.

註

1) 本研究の一部は、日本社会心理学会第 48 回大会、および、北海道心理学会第 54 回大会において発表した。

2) 自由記述で PDR のメリットとデメリットについて回答してもらった(N = 52、男性 32 名、女性 20 名)。教員 1 名、大学院生 3 名で KJ 法を行った結果、PDR のメリットとして、「ネットワークの拡大」、「良き友人・理解者・相談者・話相手」、「ポジティブ感情の喚起」、「精神的な支え」が挙げられた。PDR のデメリットとしては、「情報の漏洩」、「他者からの疑惑・誤解」、「ネガティブな感情の喚起」、「哀愁の喚起」、「嫉妬、未練の喚起」、「次の恋愛への足枷」が挙げられた。

3) PDR のみ群と PDR と恋人をもつ群の PDR についての回答、および恋人のみ群と PDR と恋人をもつ群の恋人についての回答をそれぞれ比較した結果、すべての行動特性で有意な差はみられなかった。

対人社会心理学研究, 10, 2010

A study of the closeness in Post-Dissolution Relationship from the viewpoint of behavioral characteristics:

Comparison with romantic relationship and opposite-sex friendship

Tsukasa YAMAGUCHI (*Graduate School of Social Welfare, Hokusei Gakuen University*)
Tamio IMAGAWA (*School of Social Welfare, Hokusei Gakuen University*)

We compared Post-Dissolution Relationship (PDR) with romantic relationship and friendship of opposite sex from the viewpoint of interpersonal closeness. 144 participants(75 male and 68 female and 1 unidentified) answered the questionnaire. Results of 2-way ANOVA, based on the score of RCI(Relationship Closeness Inventory) as dependent variables and sex and relationships as independent variables, romantic relationship showed significant higher score than other relationships and not significant difference between PDR and opposite sex friendship. We found interaction between sex and relationships. These results suggested that women distinguished PDR from opposite sex friendship but men did not.

Keywords：PDR, RCI, romantic relationship, opposite-sex friendship, dissolution of romantic relationship.